



その学生は、とつさに手にしていた本を大きく開いたイノシシの口に突っ込むと、幸いイノシシは窒息死した。学生はイノシシの頭を切り取って大学に持ち帰り、みんなでクリスマス

のごちそうにしたという。

アメリカの作家、ワシントン・アーヴィングの「スケッチ・ブック」によると、このイノシシの頭は、十九世紀ごろには豚の頭で代用(?)されるようになったらしく、そんな食事風景を描いている。

が、その豚の頭肉を前にして歌われた歌が「イノシシの頭肉」というのだったというから、イノシシの伝統はまだこのころまで生きていたらしい。

もつとも、クリスマスにどこの家でもイノシシの頭肉を用意するというわけにはいかなかったから、一般庶民の家では、かわりにイノシシの頭をかたどったクッキーや砂糖菓子を作って代用した。

その伝統がいまもなお残っているのがドイツで、ドイツでは「豚の頭は新しい年の幸運を呼ぶ」と言われている。

「面鳥」と呼ばない豚の頭は幸運を呼ぶとかで

わが国では「盆と正月がいつしよに来たような」というが、洋の東西を問わず、ハレの日にはごちそうがつきもの。ヨーロッパやアメリカでは、もちろんクリスマスが一年中で最大の祝日で、日本のようにことさら新年をおめでたがる伝統はない。

そのかわり、クリスマスには一年中でも最高のごちそうにありつくことになっていて、それも昔は日本の忘年会のように飲めや歌えの大宴会となるのが好きたりみたいだった。

なかでも九世紀から十二世紀にかけての英国では、文字通りの大盤振る舞いが競って行われ、ヘンリー三世は一週間続けてクリスマスパーティーを開き、そのために六百頭の牛をつぶしたとか、リチャード二世は二千人の料理人を調達して二万人の客を招待したとか、いかにも豪華なエピソードがいくつも残っている。また、ヘンリー四世は当時としても型破りな「大食ミサ」なるものを催し、そのパーティーはなんと五日間も続いたというから、日本のおせち料理などハレのごちそうとしてはいかにもいじましい。その英国で、イノシシの頭肉といえは、長い間、いまの七面鳥に相当するようなクリスマスのシンボル料理だった。

伝えられるところでは、クリスマスイブの日、オックスフォードの大学生が本を読みながら森の中を散歩していたところ、とつじょ一頭のイノシシが飛び出し、学生に襲いかかった。